

アネモネ F1 モナリザ



学名 Anemone cornaria L./ キンポウゲ科
和名
原産国 地中海沿岸（夏期高温乾燥 冬期温暖湿潤）

特性・・冷涼な気候を好む宿根草。
夏期乾燥状態では休眠する。
開花特性・・高温長日（ただし、日長の影響はあまりない）
開花期・・9月中旬～10月上旬のポット苗の場合、12月～4月開花。（冬期最低8℃）
栽培環境・・日当たり良く、排水の良い土壌。
栽培適温・・昼温 15～18℃、夜温 7～9℃
（25℃以上で生育停止 30℃以上で枯れの危険）



定植

定植時期・・高・寒冷地 6～7月
暖・中間地 9～10月
定植間隔・・株間 30cm、条間 15cm、2条
植え
畝・・60～70cm

●到着時の苗について
苗が届いたら、すぐに開封し苗を広げる。
苗の状態を見て、乾燥状態であったら灌水を行う。
ポットの根がまわっている場合は、少し根をほぐしてから定植すると活着が良くなる。
その他、苗に問題があった場合は状態等を早目に連絡する。その際、苗の箱に明記してあるポットNo.も控えておく。

●定植方法
高温乾燥時の定植は休眠を引き起こす可能性がある。そのため、定植の数日前から寒冷紗をかけ地温を下げておく必要がある。
さらに、乾燥を避けるため、定植前に灌水を行い、定植後にもう一度灌水する。
定植後、活着するまでは寒冷紗をとらない。
また、定植の際にクラウンの部分まで覆土すると開花が遅れ、最悪の場合枯死するので注意。

肥料

元肥・・N-P-K=1.2-1-1.2kg/a
追肥・・随時
PH・・6.8～7.0
EC・・0.5mS

作型

●促成栽培・・12月～4月中旬出荷
9月上旬プラグ苗、または中旬ポット苗定植。
12月から加温 5～10℃加温開始。
※夜温が高すぎると、開花は促進するが切花の本数や品質は逆に低下するので注意。
●抑制栽培・・9～12月出荷
6～7月プラグ苗定植

灌水の際、地際に水がかからないようにすること。
地際の過湿は病害が発生しやすい。

出荷

採花・・1回～2回開花をさせ、花が閉じたとき
地際より採花する。

栽培事例

<茎割れ>
窒素多過⇒施肥、灌水を控える。要土壌分析。
灌水多過⇒灌水を控える。粘土質の土壌など水はけの悪い土地では注意が必要。
ホウ素欠乏⇒微量要素肥料の施肥。低温によりホウ素吸収が出来なくなる場合もある。
PHの異常⇒7.0を目安に補正
（その他、急激な温度や湿度の変化により生ずることもある）

<花首の曲がり>

窒素多過⇒施肥、灌水を控える。要土壌分析。

病害虫

◆灰色カビ病

茎、葉、花に淡褐色の病斑が発生した後、灰色のカビ状胞子が密生する。
換気をし、湿度を下げる。下葉を整理して通気を良くする。

◆モザイク病

葉にモザイク症状が出る。葉がねじれて奇形となる。症状の激しい場合は枯死。
ウイルスによるため、発病後は速やかに病株の抜き取りと焼却処分。アブラムシなどで伝染するため早めに駆除する。

◆炭そ病

別名カールリーフ。
新葉が激しくカールしながら伸展するのが特徴。
症状が激しい場合は新葉が黒変腐敗する。
初期は境界が不明瞭な黄緑色の斑点を生ずるが、過湿条件下では淡褐色となる。
生育全般で発生する。
雨滴や灌水によって広がるため、頭上灌水を避け、換気により通風を良くする。

◆菌核病

茎葉が暗緑色から暗褐色の水浸状斑紋を生じて腐敗する。黒色の菌核をつくり、土壌伝染する。
発生した場合は、天地返しなどを行い、菌核を地中深く埋める。

◆ネキリムシ

定植後に発生しやすい。根痛みから休眠を引き起こすこともあるので、予め防除しておくが良い。

◆アブラムシ

モザイク病の伝染源になるため、定期的に防除が必要となる。

◆ネコブセンチュウ

根および塊茎にこぶを生じ、地上部の生育不良を引き起こす。
低温に耐性があるので、予め土壌消毒で防除する。

◆ハガレセンチュウ

葉に発生し、葉脈で区切られた褐色の不定形病班になる。
雨が多いときに発生しやすく、症状は下葉から上葉へと移行する。
被害葉は摘み取って焼却処分とする。

◆ナメクジ

クラウンを食害することがある。